主イエスを知る　　ペテロ第二 1 章 1〜4 節

ペテロの手紙第二では、「敬虔な生活」を送ることが強く勧められています。信仰者が成長するためには敬虔な生活を送ることが必要であると聖書は教えます。それでは、「敬虔」とはどういうことでしょうか？　聖く、正しく生きることでしょうか？ そのような生活をあこがれる人の顔も浮かんでくれば、逆に「だからキリスト教は嫌いなんだ。何か聖人君子ぶって。偽善者じゃないか」そんな声も聞こえてきます。実際、私も信じるまではそんな風に思っていました。「敬虔」とは、道徳的、宗教的であることなのでしょうか。人に自分をいい人、立派な人として見てもらえるようにすることでしょうか。もしそうなら、イエスの時代のパリサイ人や律法学者はいちばん敬虔な人たちでした。しかし、イエスは彼らの見せかけの敬虔を強く非難されています。聖書はイエスの生涯を「敬虔な生涯」と言っています。ヘブル 5:7 に「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました」とあります。このことはイエスの生涯は罪のない生涯であったというだけでなく、イエスの生涯は、神に信頼し、神に従う本物の敬虔を示すものであったということです。

ローマ 1:18 に「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されている」とあるように、人間の罪には、不正や不道徳だけでなく、神を神として崇めず、恐れず、従わない「不敬虔」も含まれています。「不敬虔」とは言い換えるなら「神を神として生きようとしない」「自分が神のようになろうとする」ことです。ですから「敬虔な生活」「敬虔に生きる」とは立派な生き方や尊敬される存在、注目されるような者となることを目指すということよりも神を神として生きる、神の前に遜って生きることです。そして不敬虔は「罪」ですから私達の心がけや意志力では解決することはありません。だからこそ主イエスの十字架の贖いがあったのです。

人間の罪には大きく分けて 2 種類あると聖書は教えています。一つは不正、不道徳といった分かりやすい罪です。もう一つは自分自身を神とすること、自分が神のようになろうとすることです。普通、私達は分かりやすい罪を意識しやすいものです。たとえばローマ 1:29〜31 に次のように出ています。「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。」そしてもう一つの罪、つまり自分が神になろうとすることについてはあまり意識しません。なぜなら一般的にはそちらの方が社会的にも立派で、尊敬されるような人が多いからです。パリサイ人、律法学者は当時、イスラエル社会では非常に尊敬され、社会的評価は高かったのです。私達は聖書を知ってからパリサイ人のことを偽善者として意識していますので最初からパリサイ人たちを良くない人たちと見ますが当時は社会的に評価の高い立派な人たちであったのです。しかし心の中は神など必要としない、また自らが神になろうとする不敬虔な人達であったのです。そして、イエスが十字架に架かってその命を献げてくださったのは、私たちをその「不敬虔」から救い出すためでした。ローマ 5:6 に「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました」とあるように、敬虔なお方が不敬虔な者のために死なれたのです。神の救いとは、私たちを不敬虔から敬虔へと導くものなのです。

ペテロの手紙第二 1:3 に「いのちと敬虔」という言葉がありますが、これは「敬虔な生活」と言い換えてもよいでしょう。私たちは、かつて、「敬虔な生活」とは程遠い者でした。神を敬い、神に喜ばれよう

とするよりは、自分が誉められ、自分を喜ばせることが人生のすべてでした。世界が自分を中心に回っていると思い込み、そのような生き方をしていました。テトス 2:12 に「不敬虔とこの世の欲とを捨て」とあるように、「不敬虔」と「この世の欲」とは、聖書では、よく一緒に使われます。自分が神となろうとすればするほど比例してこの世の欲が強くなることを聖書は指摘しているのです。ヨハネ第一 2:15-16 に「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです」とあります。私たちは「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」といったものを追い求め、それを満たすことが幸せになることだと信じていました。しかし、この世のものはやがては去っていくもので、人はこの世のものでは、ほんとうに幸せになることはできないのです。この世でどんなに成功しても、それはわずかの間のことで永遠には続きません。しかし、神とキリストのために、信仰によって行うことは決して無駄にはなりません。「世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます」（ヨハネ第一 2:17）とあるとおりです。

昨年、コロナ・ウィルスの感染が拡大するに連れてどのように対応したら良いかということでいろんな言葉が出てきました。「コロナに負けるな。強く生きよう」「コロナに打ち勝つ」といったことばもあれば、コロナは敵ではないのだから共存する思いで「ウイズコロナ」という言い方も出てきました。確かに、このような社会状況にあるときには、困難に負けない強い意志が必要です。また、さまざまな報道に一喜一憂する私たちには「平安」も必要です。物事は必ずよくなるという「希望」も必要です。国連のグテーレス事務総長が昨年末「来年（つまり 2021 年）を癒しの年にしましょう」と言いましたように今年は本当に「癒やしの年」であって欲しいと思います。しかし、困難の中で私たちを支える「力」、揺るがない「平安」、確かな「希望」などはどこにあるのでしょう。それは、この世にはありません。キリストにしかありません。そして、それはキリストが与えてくださる「敬虔な生活」の中ではじめて体験できるものなのです。

神を知らない人は、「こんな時に『敬虔』なんて、何の役にも立たない」とか「神を神として認め、神を求めて生きたからといって何が変わるというのだ」と言われるかもしれませんが、そうではありません。イエスは神の国とその義を第一にするとき、必要なものが与えられると明確に言われました（マタイ 6:33）。また主を喜ぶことが、私たちの力になるのです（ネヘミヤ 8:10）と書かれています。神は「神を愛する人々…のために…すべてのことを…益としてくださる」のです（ローマ 8:28）というみことばもあります。これらはキリストの約束、神の約束です。暗記しているほどの聖書のことばですがではそのことを信じているでしょうか？聖書は「肉体の鍛練もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です」（テモテ第一 4:8）と教えています。この年が「癒やしの年」となるために、私たちは、この世のものに振り回されるのではなく、「敬虔な生活」に目を向け、それを目指していきたいと思います。

最後に「敬虔な生活」はどのように営まれてゆくのでしょうか？　神が、私たちに「敬虔な生活」を送る力を与えてくださることを「聖化」と言います。3 節には、「主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与える」とありました。聖化の力はイエス・キリストから来るのです。4 節では「聖化」とは「神のご性質にあずかる」ことだと教えられています。「この世の汚れ」から聖められ、「世にある欲のもたらす滅び」から救われるだけでなく、もっと積極的に、「神のご性質にあ

ずかる者」となることとは私たち被造物が永遠の神のご性質にあずかるということでもあるのです。

「神のご性質にあずかる」とありますが、それはどのようにしてでしょうか。それは私たちが神から生まれることによってです。ペテロ第二 1:3 に「いのちと敬虔に関するすべてのことを私たちに与える」とあります。子どもは親の遺伝子を引き継いで生まれてきます。それで、年齢が進むにつれて、父親や母親に姿形が似てくるのです。神もまた、イエス・キリストを信じる者を「神の子ども」として生んでくださいました。あえて言うなら、神の子どもたちは、神からの霊的な DNA を受け継いで生まれたのです。父なる神が人としてのイエス・キリストにお与えになったのと同じ性質、つまり、イエスが持っておられた聖さや正しさ、神への信頼や従順、また人への愛やいつくしみなどを持つ者としてくださったのです。ですから、「神の性質にあずかる」とは、神のひとり子である「キリストに似た者になる」ということでもあるのです。

しかし、子どもが親に似るといっても、DNA がすべてを決定するわけではないように、私たちが「神のご性質にあずかる」のも、生物学的、自動的なものではありません。たとえ、遺伝的なつながりのないいわゆる養子としての子どもでも、親子の愛の関係の中で育てられていくと、顔や姿まで似てくるものです。人は、いつも関わっている人と似てくるというは本当のことです。私たちは、神の子どもとして生まれることとともに、神とのまじわりの中に生きることによって、神の子どもの性質が成長していくのです。それは、日々の生活の中で、また、人生の歩みの中で、どれだけ神と深くまじわったかによります。「神のご性質にあずかる者」というところで使われている「あずかる者」という言葉は、「まじわり」を意味する「コイノニア」という言葉から出た派生語です。この言葉は聖書では「仲間」（マタイ 23:30、ヘブル 10:33）とも訳されますが、「仲間」といっても、ただいっしょにいるだけというのでなく、苦しみも、慰めも、患難も栄光も共にするような間柄を表します。イエス・キリストは私たちを「友」と呼んでくださいました。親しい仲間と言っても良いでしょう。「キリストを知る」というまじわりの中で、私たちは神の子として成長し、キリストに似たものとされるのです。

しかし、もし、私たちが「イエス・キリストを知る」ことを怠るなら、この御言葉も「絵に描いた餅」で終わります。次の 8 節に「これらがあなたがたに備わり、ますます豊かになるなら、あなたがたは、私たちの主イエス・キリストを知る点で、役に立たない者とか、実を結ばない者になることはありません」とあります。ここで「キリストを知る点」と書かれているのはキリストに出会い、キリストを信じ、キリストを受け入れることによって得られる人格的な知識です。また、日々の生活の中で、イエス・キリストに信頼し、従うことによって、イエス・キリストの恵みを受け、「イエス・キリストは生きておられ、私に、このようなことをしてくださった」と、証しすることができるような体験的な知識です。これに優る知識と体験はありません。

ペテロ第二 3:18 に「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。」とありますように「イエス・キリストの恵みと知識において成長する。」これが私たち信仰者の明確な目標です。救われた者、信仰者が神の御力を経験しないで日々生きることほど残念なことはありません。みなさんは仕事のことや家庭のこと、人生のことなどで、さまざまな計画・予定、また目標を立てておられるでしょう。その中に、「敬虔な生活」という目標があるでしょうか。そのための力、聖化、きよめの力をキリストから受けるために、もっと「キリストを知る」、「主イエスを知る」そのための具体的な計画を持っているでしょうか。そのような霊的な目標を持ちたいと思います。そして神は今も生きて働いておられるということを証しできるような歩みをしてゆきましょう。祈ります。